

すべしこの青年学生諸君ノ

この十年はりのストライキたる日・18闘争の政治目的は何な。い、既に十年前の青年学生は何ぞめくって闘ったのな、そして、この十年間を向の目的の準備として刻印することなすべきのものな。そのことを正面から問われなければならない。そのことをはずして、「諸要求を呑みこんで」という共産主義者の、自己防衛をもつた大衆闘争は何り力たれないのである。

六〇年代の革命的な大衆行動とは、学生共産主義者か、六全協以降の共産主義運動の歴史の断絶を是めるものとして、「レーニン主義の復権を掲げ」に共産主義を、日共にならぬ前衛党建設への飛躍をなすに闘いとして、組織したものに他ならない。日本の政治的左翼か、この党建設の飛躍と転化の回響をつかむこともできず、敗北した故に、日共の理性を新左翼の理性もフ口独からの転向・挫折なのである。七〇年代の党建設の闘いとは、この解党主義という歴史の断絶の全結果をうけとり、六〇年代後半の闘いを党建設の敗北としてのみ規定しきり、転向・挫折の文明を生み出す思想方法・工作法そのものを廃絶するべく少数の共産主義者の手にあつて闘いとりれてきたのである。

これは、七〇年代中期、六〇年代後半の闘争の敗北を生み出した解党主義の基礎たる「レーニン研究会」等々といつたサークル主義を、前衛党として責任をもつて統合し、七四年フオーム闘争や七五年福川戦スローガン闘争を通じて、前衛党建設を進めていったのである。

また七〇年代の一時代とは共産主義運動なりの転向・挫折か一つの社会層として形成された。前衛党は、それを生み出す根拠そのものを廃絶する条件を培養してきた時代なのである。

転向・挫折の文明とは、共産主義の全歴史を統合して共産主義者への態度が根本的に誤つており、統合してきた苦闘に対して自己防衛をはかり、共産主義内部の分裂や断絶をあはつたり、大衆運動で代位をし、共産主義運動の全歴史から液着をつける思想方法・工作法を手にする苦闘のみを避けてきたのである。とりわけ、七〇年代後半の共産主義者からの転向・挫折とは、この革命的理論——うろたえたりれた共産主義の思想方法・工作法を手にする闘いからの転向・挫折に他ならないのである。

「自己防衛をうろたえたりれた共産主義の思想方法・工作法を手にする闘いからの転向・挫折に他ならない」といふことは、自己防衛をうろたえたりれた共産主義の思想方法・工作法を手にする闘いからの転向・挫折に他ならない。

ち砕けるという事ではなく、党の政治目的をもつた指導者のために働いて、その政治目的を貫徹して、はじめから砕くことなすべきのである。そして、その時そこにある政治諸関係―権力問題をめぐる全政党関係―を政治目的貫徹のために利用することを避けて、自分は指導者のために働いていこうという構想を廃絶していかなければならない。

さらに、社会主義者の移行形態は、下から自然発生的につくりだされていくのではなく、共産主義の歴史の統合の因縁形態の中から生まれるのであり、最高指導部内の貫徹形態の差異に依つて入る。国家独占資本主義を介し、「指導者のために働く」という中間駅を通じてのみあるのである。

すべしこの青年学生同志友人諸君ノ
闘争が成功したかゆえの自己防衛主義をいかにうろたえたりれたのな、それは、派生した全諸結果をすべしうけ取つて、先行的に党内闘争として組織していくことであり、マル青同的理性を統括された因縁形態がいかに闘いとられてきたのなを理解することであり、「指導者のために働く」といふことをはずして、三無フアシズム解体闘争をおし進めることなすべきでないといふことである。

全生活者マル青同的社會運動にノ
全理性をマル青同的闘争活動にノ
マル青同的闘争方法―工作法の下に、社会主義に向かう闘争の入口へつつけノ
超てノ 戦時の人間的理性と行動力の獲得をめぐしてノ

来たりノ 社会主義建國統治を習得する正義の戦場へノ
開けノ 全人民を社会主義に向かわせるための情勢をノ
集えノ 共産主義の理性を解放する党旗の下にノ

全人民は腐敗せる軍事七國の道をつみだし、三無フアシズム解体闘争をもつて、社会主義建國に向かう戦時の決断を下せノ

一九八〇年 十一月十八日